序

本學が昭和廿七年十一月一日創立八十周年を迎えるに當り、是を記念して色々な事業が計畫されたが、其の間に本學八十年史の編纂が企てられた。

幸に是が衝に當る人に其の人を得て、茲に見事に八十年史が刊行さるゝに至つたことは誠に慶賀に堪えない。

執筆者の熱心な努力に依つて本學の歴史に幾多の新事實が發見せられ、由是單に本學の歴史と言わんより、我國の黎明期に於ける醫學史として重要な文献となつた事は誠に喜びに堪えない所であつて、執筆者に對し敬意を表する次第である。

本八十年史の編纂に依つて本學設立の意義が明瞭となつた。時の爲政者は、天皇の東京遷幸による京都の衰微を救わんために諸般の施設を計畫したが、其の一環として本學が創立されたのである。

此の點を思う時、自ら本學の存在の意義と使命が明瞭となる。

更に本學が過去八十年の間辿つて來た跡を顧る時、自ら本學が將來進む可き道も明であると考える。

本學は今日迄度々の危機に遭つた。而し其の都度、學内外一丸となつて危機を克服し今日に至つたのである。

此の點も、本學の將來の發展を思う時銘記されなければならない事と考える。

斯る意味に於て本八十年史の編纂が、單に記錄を止めると云う以外に重大な意義があると思う。

昭和二十九年十月五日

片　岡　八　束